

平成30年度 入学試験問題
(東京・東海・中四国・福岡会場)

国 語

(60分)

〔注意〕

-
- ① 問題は㉠～㉣まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入のこと。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入のこと。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

白

紙

問題は次のページから始まります。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

宗教経験としての禪(注1)ぜんを説くにあたって、まず第一に宗教経験とは何か、この意味を一応定義しておかねばならぬと思うのである。いったい、経験ということは厳格にいえば人間の場合にのみ用いられる言葉であって、動物植物などの場合にはありえない、といいきることはできないかも知れぬが、経験という事は意識があつて始めて存在する事実であり、しかもその意識は記憶から成立するものであるとしたならば、経験という言葉は人間において最も十分なる意味を示しているものであるといえるのである。犬などが人から打たれて恐ろしいと思つて逃げるのは、それは犬の経験であるが、こんな経験には反省が伴わないのである、したがつて何の意味もない。人間の場合はこれに反して、もつともつと深広な、意識の根底の上に立つ経験が可能になっているものである。Ⅰ 宗教経験においては、人間であつて始めて許さるべき言葉なのである。そこで、それならば、いったいこの宗教経験と言ひ得られる事実はいかなる種類の経験であるか、ということを知りたくなるわけである。それにはまず宗教そのものを知ることが十分でなければならぬのである。

ゆえに、ここに、宗教に対するわれわれの観察上の立場を二、三お話ししておかねばならぬと思う。

第一に社会的事象として宗教を見るならば、それは一つの制度とも見られるのである。かの本山とか末寺(注2)だんと、檀徒(注3)、信徒、という風に組織づけられている、これらの組織の上からして宗教は一つの社会的関係を表示する現象だと見ることができる。実際、宗教は全体の社会生活を構成する一分子であるからである。今日、大分やかましい問題になつている宗教法案(注4)というものも、宗教を一つの社会的生活の一事象と見て、始めてその必要が発生したものと考えられるのである。あの花祭(注5)なども、この点から考えてみると、また一つの宗教の社会的活動性を表示しているものといえるのである。

次に宗教を儀式的の方面から観察することも可能である。大体において儀式のない宗教は宗教でないといわれているように、経文の読み方や、その他服装や大小の儀式作法やお祭りなど、あらゆる儀式がそれぞれの宗教に存在している。思うに儀式のない宗教はちょうどⅡ のようなものである。(注6) 禪宗ではよく本来無一物(注7)ほんらいむいつぶつなどというから、本来無一物のところに何ゆえに繁雑なる儀式の必要ありやと、世間では往々に疑う人もあるが、どうしても宗教には儀式は不可欠なものである。これがなくては宗教が幽霊的になり、その生きた力を現わしえないのである。また寺院の建築なども一つの儀式と見られるのである。キリスト教、イスラム教、その他の宗教と仏教の寺院建築とを比較すると、その内面的差異が直ちに建築物という外形にも現われている。その各自の宗教的感情生活の相違がニヨジ

ツに形骸けいがいの中に包まれているということは、宗教の特殊性を知る上にまことに便宜でもあり、また興味ある事でもあるのである。また宗教はこれを知的方面から観察することも可能である。

- A けれども知性と宗教の不可分的関係に立つことは否定しえない事実である。
- B いったい、われわれ人間の場合においては知性、理知というものがわれわれ人間性の根もとまでくい入っているのである。
- C それならば知性それ自身のみで宗教でありうるかといえ、ちょうど社会的活動が宗教でなく、儀式が宗教の全幅でないことと同様に、これまた許さるべき事柄ではないのである。
- D 宗教はどうしても哲学の力を多少なりとも借りねばならない関係の下にあるからである。
- E したがって宗教そのものの中にまでもはいり込んで来ることは免れない事実なのであるから、宗教と知性とは不可分離のものだといわねばならぬのである。

また宗教を道徳上から眺めることも可能である。いったい世上においては、宗教と道徳とはどちらがより根本的なものであるとか、または宗教は従であつて道徳が主であるとか、またはその反対であるとか、いろいろとこの問題について多くの議論が存するのであるが、本来、宗教は道徳ではないのである。しかしまたそうかといつて、道徳をことごとくハカイし去つたところに宗教があるとはいえないのである。善人が必ずしも立派な宗教家ではなく、立派な宗教家だからといって必ずしもその時代にその人が善人として通るものとも限らない。そもそも宗教なるものは道徳以外(註B いちせいめん)に一生面(註B いちせいめん)を開拓しているものだからである。中世(註C)においてキリストの使徒たちがあらゆる当時の道徳上から向けられた多くの非難に対して、カンゼン(註C)と立って反抗を続け、または仏教(註D)でも、ある時代には、人を何らかの形式の下に殺すというようなことによつて、宗教的な人間の精神の満足をかち得たという。今日からして考えてみれば実に誤つた観念をもつていたことは、いずれもこの宗教が道徳以外に一方面を別に開いていた事実を、有力にシヨウコ(註D)だてるものであるといえるのである。

以上は宗教に対する観察上の四つの立場を示したものであるが、これらの四つの要素をまことに手ぎわよく科学的に化合させ抱合させてゆくとしても、それで決して宗教を成立せしめてゆくものとはならないのである。ここにいま一つの大切な要素がある。そして、これこそ宗教の本体を形成する最も重要な要素をなすものである。私はこの要素を宗教経験という名題の下に説いてみようと思うのである。これが以上の四要素に加わらなければその化合のしかたがいかにセイコウ(註E)であつても、そこに宗教なるものが形成されるこ

とは不可能である。実に宗教をして可能ならしめるものには、この個人的宗教体験であって、したがって今日ここに最も考うべき重要な眼目となっているものなのである。

さてそれならば、その宗教体験とは、一体、いかなるものか、ということになるが、個人個人がこの体験という最後のところまで出てくる道筋には、宗教の社会的活動とか、儀式とか、道徳とか、理知とか、いずれも相交わっているのである。宗教はこの最後の体験という所まではいってこなければ、真の妙趣は味わうことはできないのである。またその妙趣が現成してくるようであれば宗教は宗教としての生きた用をなさないのである。それなら体験ということはいったい何かということになるのであるが、ここではしばらく人の心を分析して考えることの可否を論じないこととして、体験とはこの心、すなわちわれわれの主観が、一定不変の、ある態度を持って、内外の境界に対してゆく、その呼吸が自分の手にはいるということである。内の境界というのはちよつと変な言葉であるが、われわれの心の奥深くあると考えられるようなものに対して、その主観が一定の態度をもってこれに臨むということなのである。そしてこの内外境界に対してわれわれの主観の持つ一定の態度が確定して、始めてそこに宗教の意義が成立するのである。

いったい、われわれの精神的不満というものは、この主観の内外界に対する態度が一定せぬ間は、どうしてもやまないものなのである。そしてそこにわれわれは心の悶えを感じて安心せぬ、落ちつかぬ、等々の心持を感じるのである。しかしながらこの主観が内外界に対して一定の態度をとるに至るまでの道筋としての精神的不満、^(注9)煩悶は人間にして始めて可能な事柄なのもある。人間以外にはこの不満がない。すなわち、われわれの見るところによっては、すべての植物動物はいずれもその外境に安心していると思われるのである。人間は神と動物との中間にぶらさがっているから、そこにわれわれの刻々痛切に感ずるところの精神的不安なるものが、つきまとして離れないのである。

(鈴木大拙「禅とは何か」より・一部改変)

(注1) 禅 …… 精神を集中して無我の境地に入ること。

(注2) 檀徒 …… 一定の寺に属し、寺に金品を寄進している家の人。

(注3) 信徒 …… その宗教を信仰する者。

(注4) 宗教法案 …… 「教会」「寺」「教派」「宗派」の規定に関する法案。

(注5) 花祭 …… 四月八日に釈迦の誕生日を祝う灌仏会かんぶつえの通称。花で飾った御堂を作り、その中に釈迦の誕生仏を安置して甘茶をそそぎかけて供養する。

(注6) 禅宗 …… 坐禅ざぜんによって仏道をきわめようとする仏教の宗派。

(注7) 本来無二物 …… 本来すべて空^{くう}であるから、自分の物として執着すべきものは一つもないこと。

(注8) 一生面 …… 新しく開いた方面。

(注9) 煩悶 …… いろいろと思わずらうこと。もだえ苦しむこと。

問一 二重傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。(楷書で丁寧に書くこと。)

問二 傍線部①「宗教経験とは何か」についての説明として最も適当なものを次の中より一つ選び、記号で答えよ。

- ア 打たれた時に反省を伴って逃げるといふ、動物植物の場合には決してありえない行動をとるようになること。
- イ 様々な観察上の立場から眺めることによつて、宗教がいかなるものなのか、十分に理解するようになること。
- ウ 宗教を構成する制度・儀式・知識・道徳の四要素が融合して、その真の妙趣が現成してくるようになること。
- エ 心の奥深くにある精神的不安に対しても、自分独自の変わらぬ考え方で対処し、解消できるようになること。
- オ 神と動物との中間にいる人間が、つきまとつて離れない精神的な不安を刻々と痛切に感じるようになること。

問三 空欄Ⅰに入れる語句として最も適当なものを次の中より一つ選び、記号で答えよ。

- ア いづくんぞ
- イ むしろ
- ウ しかれども
- エ 願わくば
- オ いわんや

問四 空欄Ⅱに入れるのに適当な表現を選べ。

- ア 無一物の宗教、つまり禪宗
- イ 身体のない心、または幽霊
- ウ 特殊性のない、まるで建築
- エ 心のない身体、まさに形骸
- オ 建築物という、一つの儀式

問五 文中の A～E の文章を正しい文脈になるように並べ替えよ。ただし C は三番目になるようにすること。

問六 傍線部②「仏教でも、ある時代には、人を何らかの形式の下に殺すというようなことによつて、宗教的な人間の精神の満足をかち得た」とあるが、この例を挙げたのは、筆者のどんな主張を証明するためか。同じ段落内から十五字以内で抜き出して書け。

問七 傍線部③「人間以外にはこの不満がない」とあるが、なぜ人間だけにこの不満があると筆者は考えているのか、本文中の表現を使い六十字以内で答えよ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

馬車の中にはお婆ばあさんが五人居眠りしながら、この
I は蜜柑みかんが豊年だという話をしていた。馬は海の鷗かもめを追うかのように尻尾しっぽを振り振り走った。

馭者ごしやの勘三は馬を大変愛している。その上、八人乗りの馬車を持っているのは、この街道で勘三一人だ。また彼はいつも自分の馬車を街道の馬車のうちで一番綺麗きれいにしておく程の神経質だ。坂道へさしかかると彼は馬のために馭者台からひらりと下りてやる。このひらりと下りてひらりと乗る身振りがいかにも軽快であることを、内心得意に思っている。また彼は馭者台ごしやだいに坐すわっていても馬車の揺れ具合で、子供が馬車のうしろにぶら下ったことを感づけるので、ひらりと身軽に飛び下りて子供の頭へこつんと拳骨げんこつを食らわせる。だから街道の子供たちは勘三の馬車に、^①一番目をつけているが、また一番恐れている。

ところが今日は、どうしても子供が捕まらないのだ。つまり、猿のように馬車のうしろにぶら下っている現行犯を取り押えることが出来ないのだ。いつもなら、彼はひらりと猫のように飛び下りて馬車をやり過ぎ、知らずにぶら下っている子供の頭へこつんと拳骨を食らわせて、得意気に言うのだ。

^②「間抜けめ。」

彼はまた馭者台を飛び下りてみた。これで三度目だ。十二三の少女が頬ほを真赤に上気させてすたすた歩いている。肩で刻むように息をしながら眼がきらきら光っている。^③しかし彼女は桃色の洋服を着ている。靴下が足首のあたりまでずり落ちてしまっている。そして靴を履はいていない。勘三がじっと少女を睨にらみつける。彼女は横の海に目をそらして、たったたつと馬車を追って来る。

「チエツ！」

勘三は舌打ちして馭者台に帰った。ついで見慣れない高貴に美しい少女は海岸の別荘にでも来ているのだろうかと思って勘三は少し遠慮していたのだが、三度も飛び下りてもつかまらないから腹が立ったのだ。もう一里もこの少女は馬車にぶら下って来ているのだ。それがいまましいばかりに勘三は大変愛する馬を鞭打むちうちってさえ走ったのだ。

馬車が小さい村に入った。勘三は高らかにラッパを吹いてますます走った。うしろを振り返ると、少女が胸を張り断髪を肩に振り乱

しながら走っている。片一方の靴下を手にはぶら下げている。

間もなく少女が馬車に吸い附いたらしい。勘三が馭者台のうしろの硝子越しに振り返ると、つと少女の身を縮める気配が感じられた。しかし勘三が四度目に飛び下りた時には、もう少女は馬車から身を離れて歩いている。

「おい。どこへ行くんだ。」

少女はうつむいて黙っている。

「港までぶら下って来るつもりか。」

矢張り少女は黙っている。

「港か。」

少女はうなずいた。

「おい、足を見な、足を。血が出てるじゃないか。剛気な小女郎だな、え、お前さん。」

さすが勘三は顔をしかめた。

「乗って行ってやるよ。中へ乗っかってくんな。そこへぶら下ると馬が重いからよ、頼むから中へ乗ってくんな。おらあ間抜けにはなりたくねえ。」

そう言って馬車の扉を開いてやった。

しばらくして勘三が馭者台から振り向いて見ると、少女は馬車の扉に挟まれた洋服の裾を取ろうともせず、さっきの勝気な顔色は消えてしまつて、静かに恥ずかしがつてうなだれていた。

ところが、そこから一里の港へ行つての帰り道に、どこからともなくまた同じ少女が馬車を追っかけて来るのだった。もう勘三は素直に馬車の扉を開いてやった。

⑤「おじさん、中へ乗るのは厭なんだもの。中へ乗りたくはないんだもの。」

「足の血を見な、血を。靴下が赤くなつてるじゃねえか。凄、小女郎だなあ。」

二里の上りをゆるゆる馬車はもとの村へ近づいた。

「おじさん、ここで下ろして頂戴。」

勘三がふと道端を見ると、小さい靴が一足枯草の上に白く咲いていた。

「冬でも白い靴を履くのか。」

「だってあたし、**II**にここへ来たんだもの。」

少女は靴を履くと、後をも見ず白鷺しろさぎのように小山の上の感化院(注3)へ飛んで帰った。

(川端康成「夏の靴」より)

(注1) 馭者 … 馬車の前部に乗って馬を操り、馬車を走らせる人。

(注2) 小女郎 … 小娘。少女。

(注3) 感化院 … 非行少年や非行少女の保護・教化の目的で設けられた施設。少年教護院・教護院を経て、現在は児童自立支援施設と改称。

問一 空欄Ⅰ・Ⅱに入れるのにふさわしい対照的な語を考え、それぞれ漢字一字で書け。

問二 傍線部①「一番目をつけているが、また一番恐れている」のはなぜか。五十文字以内で書け。

問三 傍線部②の「間抜け」は「身軽な勘三に拳骨を食らわされる子供の愚かさ」である。それに対する傍線部④の「間抜け」は誰のどのような愚かさか。「愚かさ」に続くように三十字以内で書け。

問四 傍線部③「しかし彼女は桃色の洋服を着ている」の表現で、どういったことを表そうとしているのか。最適なものの中から一つを選び、記号で答えよ。

ア 一見十二三歳に見える少女が、大人のように非常に落ち着いた態度で歩いているので、こっそりと馬車にぶら下がっていることが余計にしゃくに障るということを表している。

イ 色鮮やかな桃色の洋服を着ている少女が頬を赤く染めながら歩く姿が、青い海沿いの道に対照的に映えて、注意すること

を思わず忘れてしまっている勘三の様子を表している。

ウ 桃色の派手な衣服を着ているにもかかわらず、少女が馬車にぶら下がっている瞬間をとらえることができないことで、勘三のプライドが傷ついているということを表している。

エ 少女の目の輝きには力強い希望を感じさせるものがあるが、それとは対照的な薄汚れた身なりを目にして、馬車に乗せてやりたいという同情を感じさせるということを表している。

オ 日頃なら即座に拳骨をくらわしている地元の子供たちとは違い、この少女はどこか高貴な様子を感じさせるために、他の子どもと同じようには扱いにくいということを表している。

問五 傍線部⑤「おじさん、中へ乗るのは厭なんだもの」と少女が言うのはなぜか。六十字以内で書け。

問六 この小説の描き方の特徴として、適当でないものを次の中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 少女に対して二度繰り返される「おい」という呼びかけは、一度目の少女をとがめるような言い方と、二度目の親しみをこめた優しい言い方により勘三の心の微妙な変化を描いている。

イ 馬車のうしろを着いてきている間の少女は勝ち気で心を閉ざした様子に描かれているが、馬車に乗ることによって徐々に勘三に対して気持ちを許し素直になっていく変化が描かれている。

ウ 「桃色の洋服」「白い靴」「白鷺のように」といった色彩を含む表現は、最後に明かされる「感化院」という一語と共通のイメージをもって少女を潔白なイメージで理想化している。

エ 「猿のように」「猫のように」「白鷺のように」といった比喩表現や、「たったたった」といった擬態語の使用は、走り続ける馬車の描写と共にこの小説に軽快なリズム感を作り出す効果がある。

オ 「剛気な小女郎だな」「凄い、小女郎だなあ」と反復される勘三の驚きの言葉は、少女が実は白鷺であったことに気づく幻想的な結末への伏線となっている。

三

次の文章は、乳母が殿の前での作法をあらかじめ教え、そのことの顛末が書かれた文章である。次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

ある姫君、殿のもとへおはすべきにてありけるを、乳母、教へけるは、「やさしく尋常なること^①をば、ものの姫君なむどのやうにこそ申せ。なにとなき事のみ、御口がましき御癖のおはします事^②の然るべからずおほえ候ふに、殿の聞かせたまはむ時、いたくものな仰せ候ひそ。あはれ、この御前のものを仰せられよかし、聞かむ、なむど思しめす時、ものは仰せ候へよ。春の鶯の、籬の竹に訪れむを聞かむやうに、珍しき御ことにて候へよ。」と教へ申しければ、「ままより先に心得たるぞ、なしに賢しく教ふる。」とのたまへば、「御心得だに候はば、それこそ心安く思ひ参らせ候へ。」とぞ言ひける。

さて、殿のもとへおはして後、二三日はつやつやものたまはず。これも余りなりと思ひける程に、殿と並びてもの召しけるに、よに良き酢莖のありけるを、なほ欲しく思はれけるにや、ひざを立て、肩をすべ、羽づくろひするやうにして、くびをのべ、声を作りて、「酢莖、食はむ。」と、二声、鶯の鳴く声色にてのたまひける。乳母、余りに心憂く、あさましく覚えて、また言はせじとて、「やがて参らせむ。」と言ひけるが、遅かりければ、「きと、きと、きと。」とぞ言ひける。まことに興さめて、殿も思はれける。

〔沙石集〕より

- (注1) 聞かせたまはむ時 … お聞きになつてゐる時
- (注2) この御前 … このお方
- (注3) ものは仰せ候へよ … ものをおっしゃいませ
- (注4) もの召しけるに … 食事を召し上がつてゐた時に

問一 傍線部①「やさしく尋常なること」⑥「なしに賢しく教ふる」⑩「やがて参らせむ」の訳として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

①「やさしく尋常なること」

ア しとやかで、不思議なこと

イ 親切で、見苦しくないこと

ウ 上品で、趣を感じないこと

エ 簡単で、目立たず普通なこと

オ 優雅で、気品が感じられること

⑥「なしに賢しく教ふる」

ア どうして差し出がましく教えるのか

イ どうしても差し出がましく教えてしまう

ウ ないとは思うが、差し出がましく教える

エ なんとかして、差し出がましく教えよう

オ どうして差し出がましく教えるのか、いや教えない

⑪「やがて参らせむ」

ア すぐに差し上げよう

イ そのまま降参しなさい

ウ そのうち参上するだろう

エ 後ほどお呼び申し上げよう

オ おおかた召し上がってしまおう

問二

傍線部②「然るべからず」とは「ふさわしくない」と訳すが、姫君のどういった所がふさわしくないというのか、解答欄の文脈にあうように、二十字以内で説明せよ。

問三 傍線部④「仰せられよ」⑤「思しめす」⑧「のたまはず」⑨「思ひける」の主体（主語）を次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。同じ記号を複数回選んでもよい。

ア 姫君 イ 殿 ウ 乳母 エ 鶯 オ 私たち

問四 傍線部③「いたくものな仰せ候ひそ」を口語訳せよ。

問五 傍線部⑦「御心得だに候はば、それこそ心安く思ひ参らせ候へ」の解釈として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア あなた様が心得てさえくださるならば、それこそ私は安心に思い申し上げます。

イ 私さえ心得てくださるならば、それこそあなた様は安心に思い申し上げます。

ウ せめてあなた様だけでも心得てくださるので、それこそ私は安心に思い申し上げます。

エ せめて私だけでも心得てくださるので、それこそあなた様は安心に思い申し上げます。

オ せめてあなた様だけでも心得てくださるならば、それこそあなた様は安心に思い申し上げます。

問六 傍線部⑩「あさましく覚え」とあるが、乳母が嘆かわしく思ったのはどうしてか、理由を五十文字以内で説明せよ。

問七 この話を通して、筆者が伝えたいことはどういうことか、次の中から最適なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 物事の真意を理解することは、鶯が鳴くように、自然とできるまでには時間がかかるということ。

イ 「鶯が鳴くように」という物事の真意を理解しないと、その代償はすべて自分に返ってくるということ。

ウ 鶯の鳴き声のまねをすることは、熟達せねばならず、多くの時間をかけないとなしえないということ。

エ 言葉の表面だけを解釈するのではなく、物事の真意を理解して鶯の鳴きまねをするべきだということ。

オ 鶯が鳴くように話をしなければいけないということは、鶯の鳴き方をまねて話すことではないということ。

カ 物事の真意を理解しないで、言葉の表面だけを解釈して理解したつもりであると、間違いが起るとのこと。

白

紙

白

紙

白

紙

白

紙

白

紙

白

紙